

## 和氣?磨論 : 文苑

著者	笠間, 益三
雑誌名	龍南會雜誌
巻	23
ページ	42-43
発行年	1894-02-07
その他の言語のタイトル	和氣清磨論 : 文苑
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4351">http://hdl.handle.net/2298/4351</a>

よ奇象からずや

晩餐後、露國の水兵等、甲板上に於て、樂器を弄し、唱歌の連唱を始む、其意を解せずと雖ども、始め其兩三曲を、謹唱するを見れば、想ふに、國帝の萬歳を祝し國家の隆盛を祈るものならん、嗚呼、彼等が忠君愛國の、赤心を涵養する素ありと謂べし、唱歌了れば、各々初めて笑顔を開て、舞踏を始む、其藝の巧拙は、全く躰と足とにあるが如し、而して中にも重もあるは、足の踏み方なり、兩手は背後に組みて、眼は遠所に着け、胸郭腹部は、前方に突出して足踏とす、一人了れば、直に一人之に代り、斯の如きもの數次にして、四人舞踏とある、内に日本婦人(醜業婦ならん)一人を加ふ、一高一低、其曲頗る妙あり、之を觀る爲め、船客盡く集る、英人あり、米人あり、魯人あり、支那人あり、韓人あり、其容貌より、躰格服裝に至るまで、各々異あり、之を見る方、却て奇觀なり、而して、最も余の感呼びしものは、日本人の矮小なることあり、何れの國人に比するも、概して短身あり、斯の如くして止まざれば、遂に、世界矮人の名を、博するに至らん、知らず大陸の山水、人躰に影響するや、否や、日暮を踏舞亦止む、即ち室に入り麥酒を傾け、日本海中、華胥の郷に遊ぶ

(未完)

## 文苑

### 和氣清謔論

梧園

笠間益三

孝謙帝寵遇妖僧道鏡。遂崇爲法王。大臣百官拜趨於其下。殆如君臣然。又有阿諛之臣。希帝旨。佞道鏡意。發妖言。以動之。於是帝決意禪位。道鏡決意篡位。其危如一髮挽千鈞。當此

之時。微清麻呂。則孝謙必禪位矣。道鏡必踐祚矣。大臣橋諸兄。吉備眞備必不言矣。百萬生靈必爲之臣子矣。清麿便正言直辭。撲凶餓於方熾。回天日於將沒。如清麿。所謂一繩維大厦者。非歟。嗚呼。士之有氣節者。當尋常無事之日。則其言行如無異於衆者。必至遭亂逆不祥之事。而后得見其氣節。所謂時窮節乃見者。故上有道鏡之逆。而後下有清麿出焉。悲矣哉。

少年行 寒月生

いざや進まむすゝみあん

目ざすみやこも間近あり。

日頃はげみしいさをしに

時をおしそつ來まゆゑに

今は人にもさきたちて

月毛のこまもいさむめり』

うしろを見れば雲ひさく

つゞく一騎も見へぬなり。

心やすかりいちはしも

追ひ及ぶものさらにあし

乗る我こまのなごはやき

來る人びどのちどれたるき』

ふりさけ見れば迥々々

野ばらに秋は寂びにけり。

右方に溪ありのなゆかし

しける樹立に啼くどりの

とゑはたに間の水おとに

碎けて流るごとくあり』

しばしあそばむおの谷に

こまの足をもやすらへむ。

されど駈け來る人びとに